

亜急性硬化性全脳炎の疫学調査

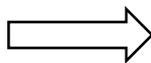
研究分担者： 岡 明(東京大学医学部小児科)

亜急性硬化性全脳炎 全国サーベイランス調査

目的: 本疾患の新規患者の発生状況の把握
本疾患の現状での臨床経過

サーベイランス2017
(前回2012年に実施 5年後の実態調査)
一次調査
全国小児神経医療機関
全国神経内科医療機関
計1595施設
目的 全国の患者数の把握
新規発症の状況

一次調査
回答率65%



• 全国で66名の患者が確認
• 2012年以降の発症と報告されたのは8名



二次調査 調査に同意頂けた50施設(55施設中)にアンケートを郵送
診療中のSSPE患者に関し、質問紙送付
回答率は65%で32施設より40名の患者について回答



二次調査では2015年発症が最後で、原因となる麻疹罹患は2002年が最後であった。臨床病期分類IV期が65%を占め、ADLとしては8割が寝たきりかつ要介助の状態で、在宅療養は53%であった。気管切開術58%、胃瘻造設術68%など、医療的ケアを要する方が過半数であった。

解 説

1. 我が国は厚生行政として麻疹の撲滅に取り組んでいるが、麻疹感染後に発症する亜急性硬化性全脳炎の新規発生は継続している。
2. 小児科小児神経科医療機関・神経内科医療機関に一次調査書を郵送にて送付し、全国で66名の患者が確認され、このうち、2012年以降の発症と報告されたのは8名で、引き続き新規発症があることが確認された。
3. 二次調査では、年齢の中央値は28歳でADLとしては8割が寝たきりかつ要介助の状態で医療的ケアを要する方が過半数であった。